愛南を編む

2018 年復興デザインスタジオ　愛南班
小原寛士　長根乃愛　堀誠
前山倫子　松野祐太　山本玄介

愛南のまちで生き、まちを活かし、まちの人々の関係を編む　―　事前復興計画

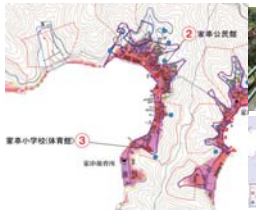
家串

美しい景観

山の傾斜がそのまま海とつながり、山と海を同時に一望できる。
また、山の斜面には現在でもいくつか段畑が残っている。

真珠の母貝養殖

真珠の母貝養殖を中心とした漁業集落であり、沿岸には養殖のための作業小屋や漁船が並んでいる。



津波災害の課題

集落部はほとんど浸水域になることが予想されている。

避難における課題　：　倒木などがある避難路の管理
一時避難場所のみで避難所が無い

復興における課題　：　作業場が被害を受ける中で生業の復興

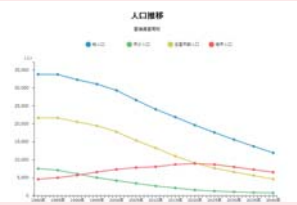
海沿いの道路は寸断の恐れがあり、集落孤立の可能性もある

愛南町

愛媛県南端に位置する。南宇和郡の旧 5 町村が 2004 年に合併して誕生。

交通　国道 56 号（宇和島市、高知県宿毛市と接続）
鉄道交通はなし

人口　21,902 人、世帯数 9410
（2015 年国勢調査）
今後も急激な減少が予想される



（RESAS より）

御荘

愛南町の中心地

城辺と共に愛南町の中心市街地をなす。
南宇和高校や町役場などの公共施設、ロードサイド店舗が集積し、
愛南町全体から人が集まってくる。

四国 40 番札所

四国八十八ヶ所の 40 番札所である観自在寺がある。
南側の平城商店街では古くから旅館や店舗が連なっている。

（浸水予想図：愛南町総合防災マップより）

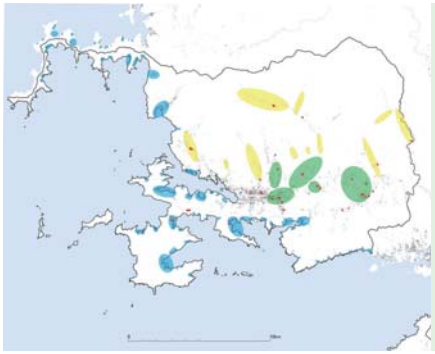
津波災害の課題

僧都川南側の中州はほぼ浸水域になることが予想されている。

避難における課題　：　①高台への早急な避難
②橋の混雑・破壊の危険性

復興における課題　：　①中州の住民の移転先
②中州の居住区域の設定

中州以外の浸水域でも、狭隘な避難路への対策などが必要。



愛南町の集落分類

居住が集中している地域をその立地で分類し、避難による集落間の移動を考える

沿岸型
津波被害　大
土砂災害　大
避難所　無

内陸型 ― 平地系
津波被害　小
土砂災害　小
避難所　有

― 山間系
津波被害　小
土砂災害　大
避難所　有

被災時は、被害の状況に合わせて
集落間での避難移動を想定する

津波被災であれば、
沿岸型 → 内陸型―平地系 に避難する

5 段階の復興プロセス

集落の孤立可能性があり、場所をまたいでの避難が想定される愛南町では、
従来の「避難所生活期・応急住宅期・恒久住宅期」という 3 段階の復興プロセスは十分でない。
今回は以下の 5 段階を設定し、その課題への対応を考える。
さらに御荘・家串をモデルケースとして具体的な提案を考える。

1	2	3	4	5
津波から逃げる	救助を待つ	避難所に住む	仮設住宅に住む	集落に戻る

発災

家串
管理が難しく、危険な避難路

御荘
介助が必要な人々や来訪者の誘導への不安

家串
孤立が想定されない滞在できる避難所や備蓄がない

知らない人たち、慣れない土地での生活での不安

集落・生業の一時的な放棄を迫られる

一度離れた集落には戻りづらいという意識
避難先に定住するほかの選択肢が選びにくい

安全を確保する準備　逃げられる・暮らせる空間づくり

人とのつながりを編む　自助・共助ができるまちへ

避難路にある障害物の除去
日常的に使える道づくり

日ごろから関わりがあれば
高齢者、小さな子供がいるなど互いの状況が分かり、
避難の補助ができる

数日間の滞在が可能な
避難所および備蓄の整備

避難所の維持には
集落の外の人も関わる

協力し自分たちで
再建する力につながる

避難先がなじみのある場所になっていれば不安が和らぐ

病気の人や幼い子供がいるなど、
手助けが必要な人のことを周りが分かっている

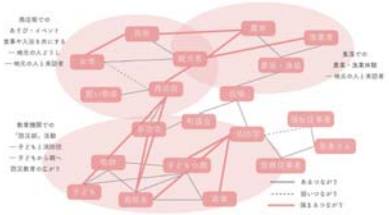
普段から集落間の行き来に加えそれぞれでの関係があれば、
「地元」の意識が広がり、集落間の移動がし易い

愛南を編む

避難や孤立への対策といった
「安全のための事前準備」に加え、
自助・共助のちからを高めるための
「つながりをつくる準備」を行う

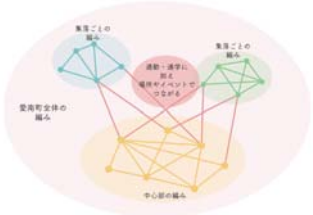
平時からさまざまな人々同士や集落間で
関係をつくっておくことが、被災時の各段階や
被災後のまちを立て直す際にの協力につながる

被害想定や課題と向き合いつつも、
愛南町にある美しい風景、豊かな生業や文化に
価値を見いだし、それらを活かした計画を提案する



愛南町内のいろいろなところで暮らす、訪れる人々が
普段から少しずつ、あるいはイベントなどで
顔見知りの関係をつくっていく

ちいさなつながりの編み



集落単位で完結していたつながり「地元」を
集落間の関係を強めることによって
愛南町全体に拡大していく

地元を広げる

「避難」と「小さなつながり」のモデルケース　家串と御荘

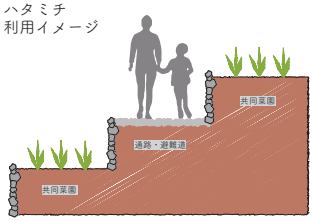
家串

避難・日常
で生きる
家串の魅力

提案：段畑を横につないだ「ハタミチ」を避難道とする

①避難道として「ハタミチ」を整備する

ハタミチ
利用イメージ



現在残っている段畑をもとに湾を囲むように横へ繋ぎ、畑と道が一体となった「ハタミチ」を整備。畑は共同菜園として、家串の人だけでなく愛南町の様々なまちの人が利用できるものとする。菜園の間には通路を設け、発災時には避難拠点へと向かう避難道としても機能する。

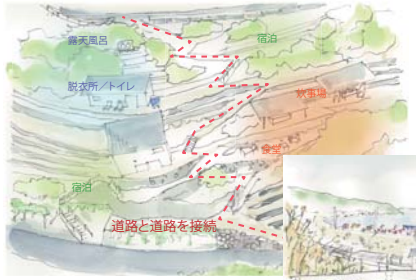
かつて宇和海沿岸に広がっていた段畑を再生することで、家串ならではの美しい風景を。

②避難時の拠点となるポイントを整備する

☐ siteA: ハタミチキャンプ

☐ siteB: ハタミチ出張所

発災前



現在通っている２本の道路の間に、宿泊、炊事、露天風呂などの機能を備えたキャンプ場を整備。地元住民の集いの場となるだけでなく、御荘を始めとした市街地からの観光客のキャンプ体験の機会を提供する場となる。

siteA からは家串の美しい海と山を同時に望むことができる

飲食店、診療所、美容院など、集落で必要となるサービスが日替わりで提供される出張所を設置。
１階部分にはキッチン、バス、トイレなどを置き、農作業中の休憩所として、さらにはこの集落に滞在したい人のための宿泊施設としてもはたらく。

発災後

キャンプで使用するテントは避難用としても機能。その他、炊事場や風呂など、救助を待っている２，３日を過ごすためのライフラインとしてはたらく。
また、救助後も家串に残って復興作業を行う人の拠点としても機能する。

出張所スペースは被災時に必要なサービスを提供する場として機能する。
宿泊施設となっていた１階部分は、壁を取り払うことで救助を待つ期間を過ごすための避難所としてはたらく。
siteA と合わせて、家串の全人口を収容できるスペースを確保。

復興５段階

発災前

他の集落や御荘から人がやってくる「ちいさなつながり」を編む

商店街が集落の人も観光客もやってくる場所になる「ちいさなつながり」を編む

津波から逃げる

ハタミチを通って避難拠点（siteA,B）へ逃げる

高校生がお年寄りを助けるなど、「ちいさなつながり」で助け合う

救助を待つ

各拠点で救助が来るまでの時間を過ごす

多くの住民は御荘の避難所に移動

避難所に住む

復興の拠点として作業中の居場所に

他の集落の住民の避難所となる「ちいさなつながり」があり、知り合いも多いため疎外感がない

仮設住宅に住む

集落に戻る

普段から集落間の行き来があるので、「地元」の意識が広がり、一度御荘に住んでも集落間の移動がし易い

御荘

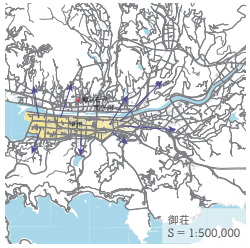
避難・日常
で生きる
御荘の魅力

提案：避難の「拠り所」として大きな地縁を育む

①仮設住居候補地の設定

内陸側の城辺は浸水しないため、その周辺のエリアと観自在寺北側のエリアを仮設住居候補地とする。事前に契約を結びスムーズな建設を促す。

②中州の住宅の漸進的移動



中州への新規居住を制限すると同時に、中州からの転居を補助することで中州の住宅を現象させる。

③被災後の店舗の立地

中州のロードサイド店舗は大きな被害を受ける。被災後、商店街の西側に立地し、商店街への流れを作る。

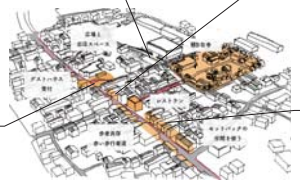
④平城商店街で住民×住民・観光客×住民 の関係を編む

仮設商店街

浸水域外に仮設商店街を建設し、商店街復興の足掛かりとする。

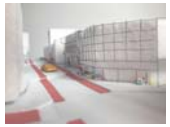
広場
ゲストハウス

商店街に多くある駐車場を広場にする。ゲストハウスと一体化して道が賑やかに。



既存店舗で分割出店

空き店舗を小さく分割。賃料を下げ、新たな商店が出店しやすくする。

広がる「いすだな」

殆どの商店がセットバックしている。その軒下で使える家具を全体で共有。